

「住民の方と連携しながら、地域の資源を活用していくことが大切なのかなと。」

「愛管内を中心に、一昨年『えひめ町並み博』がありました。」

山岡 その当時、各地に84のグループができたんですけども、現在もそのうちの3分の2が引き続き活動をしております。地方局の職員のなかにも、特に（健康福祉環境部）企画課の中島課長は、この「町並み博」を担当したんですが、今も自分で各地域に入って、いろんな団体と連携しながら活動を続けております。

それと、本庁が直轄してやっている、いわゆる「旅南予（南予広域連携観光交流推進協議会）」を中心としたまちづくりの支援や、グリーンツーリズム（以下、「GT」）の推進事業ということで、GTのいろんな取り組みを支援しているという動きも生まれました。

地元の市町・団体が、住民と一体となって自主的に活動し、それを行政側が後方から支援して、全体の調整を図っていくというのが「町並み博」の成功の要因かな

ということと、これからの南予活性化についてもこのあたりに大きなヒントがあるんじゃないかと思います。

そうした（自主的な）活動が、一過性のものではなく、それをもとに、より内容も充実したり、新しい取り組みをされているということと、まさしくそのような人の活動、取り組み、動きそのものが活性化につながると思います。

地方局長から、または地方局として地元への要望は？

山岡 この活性化対策というのは、あくまで地元の市町、あるいは関係団体、住民の皆様方の自主的・主体的な取り組み、それをやる気のあるところを支援しているというのが基本なんです。既定予算やゼロ予算事業で対応できるものについては、いつでもどなたからでもご意見を伺いすることにしております。そして、地方局で対応できるものはできるだけ即



愛媛県八幡浜地方局長
山岡 昌徳氏

時に対応するし、本庁や国に要望するものは要望を上げていくということにしておりますので、積極的にご意見を出していただきたい。

それから予算が必要なものについては、市町の懇話会を通じて出していきたい、来年度の予算で対応できるかどうか検討したいと考えております。

県の財政も厳しい状況であるというのは、皆さんもご存じのことと思いますが、一緒になって知恵を出していきたいと考えております。お金をかけるだけじゃな

しに、県の夢提案制度というのがありますが、規制緩和ですよ、これらも積極的に活用していただきたいなと思います。

地域の方との距離感は何？

山岡 私ここで2年目になるんですけど、今年からだいぶ違ってきたなと感じております。一般の方々とはお話しする機会がありませんけれども、市町や各団体の場合は、そういう関係部署の方々との間が縮まったなど、より身近になった感じがしますね。ここで一緒にやっていきたいという気持ちなんです。いろんな小規模な会でもできるだけ出て行って、挨拶してすぐ帰るのではなく、その後、残っているような意見を聞く、お話をしている機会を持ちたいと思っております。

地域活性化の力ギは何？

山岡 構造的な要因が複雑に絡んで低迷している南予を再生・活性化するのは、短期間では大変困難であろうと思います。地域の活性化に定石・王道はない。いままでも、県も当然だし、各市町も一生懸命やってきて、いまこういう状況にあるということですから。

それでも、まず地域経営の一番の主体である市町が核となって、地元の人

な団体や住民の方々と協働・協調しながら、県や国のいろいろな施策を取り込み、連携を図りながら可能なことから手をつけていく、平凡ですけど、それがいちばんの力ギじゃないかなと思います。基幹産業が基本ですので、この八幡浜地方局管内であれば、農林水産物の産地としての競争力強化。農林水産物の加工、それから加工食品なんかのひとつ価値を加えるとか、流通の強化や販路拡大、そういったことに取り組むのが大事じゃないかと思えます。

それから、この豊かな自然環境を活かしたGT、海のほうを主体としたブルー・ツーリズムといったもので、まだまだ活かされていない資源を、うまく利用できるようにこれからやればいいのかなど。それぞれに、人が中心になってやっていくわけですから、先の長い取り組みになるのかと思えますけど、頑張ってください。

南予地域の活性化に期待する一方で、地方局再編という話がありますか？

山岡 行政改革の一環で、現在の五局体制を三局体制に、という流れですけどね、部門によってはその地域に仕事が残るんですよ。例えば地方局本局がなくなるとしても土木事務所や保健所、農林関係など現場の仕事はあるわけですから、大

半の職員は残ります。その庁舎から全く人がいなくなるわけではないんですね。局長や部長はそりゃあ減りますけど(笑)。最初、地方局の事務所が空っぽになるというようなイメージが広がったもんだから、地元でも存続運動が起こったんです。そうではないんです。

最後にひとこと。

山岡 平成の大合併で、管内に16あった市町村が5つの市町に集約されて、新しい枠組みになったわけですけど、各地域でそれぞれ取り組みをなされていたものも、今後はお互いの連携を図りながら、より広域的な範囲で活性化を図ってもらいたいなと思います。この南予地域は農林水産業が中心ですから、これが元気になってもらわないといけない。

私自身が大洲市の出身なんです。だから余計に、この「南予」という言葉のやわらかい響きから、豊かな自然、温和で明るい、のんびりとした性格の、人情味溢れる人々の姿というのが連想されます。やっぱり今みたいな厳しい時代になってくると、ふるさとの原風景があちこちで見受けられる、それをいつまでも大事にして欲しい。それはこれからの地域の財産というか、宝じゃないかと思えます。